

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 4 8	独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳) Failure to reduce short-term appetite following alcohol is independent of beliefs about the presence of alcohol. アルコール摂取後、短期的に食欲減少がおこらないのはアルコールが含まれていると確信する事には関与しない	
執筆者 Yeomans MR, Phillips MF	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Nutr Neurosci 2002 ;5(2):131-9	
キーワード アルコール、食欲減少	
要 旨 <p> 以前に、昼食前にエネルギーとしてアルコールを摂取しても、その後の自発的な摂食量の抑制を引き起こさず、またある状況ではアルコールはその後の食欲を増進させる効果があることが報告されている。本研究ではアルコール含量について確信効果（被験者が飲料にアルコールが入っていることを事前に知っているか否か）を調べることにより、それらの知見をさらに進展させることにある。18人の男性被験者に水またはアルコールとしてのビール、アルコールのふくまれていないエネルギー量の等しいビール（ノンアルコールビール）のいずれかを摂取させ、20分後に昼食を摂取してもらった。その結果、摂食量はノンアルコールビールを飲んだ人でビールや水を飲んだ人よりも有意に少なくなっていた。しかし負荷したエネルギーを含めるとノンアルコールビールを飲んだ人や水を摂取した人に比べアルコールを摂取した人で一日にわたる摂取カロリーが増加していた。3つの溶液摂取後、テスト食摂取前も後も空腹度や満腹度に差はなかったが、テスト食を摂取している間の摂取量と空腹度の特異的関連は飲料により変化した。アルコール摂取後、空腹度が減り満腹度が増加する割合は水やノンアルコールビールに比べ緩やかな物であった。それぞれの飲料はテスト食の美味しさは変化させず摂食後の空腹度も増加させなかった。以前の研究と比較すると昼食前のアルコールの消費はその後の摂食量を抑制する事ができず、また食欲度の変化はアルコール含量についての確信により変化する事を示唆している。 </p>	